10/7/2015

日本・アジアのキリスト教――無教会キリスト教の系譜（4）

芦名定道

＜演習の目的・概要＞

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、年度や学期を超えて、無教会キリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされている。今年度後期は、昨年の内村鑑三、今年度前期の矢内原忠雄に引き続き、矢内原とともに無教会キリスト教における内村鑑三の後継者の一人である、南原繁のテキストを読み進める。

・無教会キリスト教の思想史的また現代的な意義について、具体的な問題状況に即した説明ができるようになる。
・矢内原忠雄のキリスト教理解を通して、国家と宗教との関わりについて、1930 年代という時代状況から、理解を深める。
・内村鑑三、矢内原忠雄、南原繁の比較研究についての手がかりを得ることができる。

「初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。二回目以降は、南原繁『国家と宗教』（1942 年）を冒頭から、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。」

↓

シラバス変更

「初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。二回目以降は、南原繁に関わる研究論文をいくつか取り上げた後に、南原繁『国家と宗教』（1942 年）を冒頭から、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。」

＜演習のスケジュールと場所＞

演習日（前期）：10/7, 14, 21, 28, 11/4, 11, 18, 25, 12/2, 9, 1/6, 13, 20
場所：キリスト教学研究室

・10/7：オリエンテーション（本日）
・10/14：講義「原子力とキリスト教思想――矢内原とティリッヒ」（前半）＋担当者確定、テキストの配付。
・演習は 10/21 より開始。
　1)福田歓一「解説１」
　2)加藤節「解説２」、
　3)近藤勝彦「南原繁における「価値併行論」と宗教的神性」(『デモクラシーの神学思想――自由の伝統とプロテスタンティズム』教文館、2000年)
　4)補論「カトリシズムとプロテスタンティズム」
・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる)、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する)。
・必要な解説を行う（芦名)。
・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

＜テキスト＞

・『南原繁著作集・第一巻』（岩波書店）あるいは、『国家と宗教』（岩波文庫）

・そのほか
　福田歓一「解説１」、加藤節「解説２」、
　近藤勝彦「南原繁における「価値併行論」と宗教的神性」(『デモクラシーの神学思想――自由の伝統とプロテスタンティズム』教文館、2000年)
　など。

＜南原繁の略歴的説明＞　(『岩波キリスト教辞典』の項目・田中光三)
・1889-1974。香川県生まれ。
・政治学者、無教会キリスト者。
・旧制第一高等学校を経て東京帝国大学卒（1914)、一高在学中に新渡戸稲造の感化、内村鑑三聖書研究会連なる。内務省を経て、1921 年に東京帝国大学法学部に転職。ヨーロッパ在外研究を終え教授（1925 年)。
・政治学史、政治学を担当。
・『国家と宗教』(1942年)。国家の本質を闡明することを通して、デモーニッシュなナチズムと日本のファシズムを批判。
・法学部長（1945 年）を経て東京大学総長に就任（1945-51 年)。日本学院院長（1969 年)。
・『フィヒテの政治哲学』(1959)、『政治理論史』(1959)、『政治哲学序説』(1973 年)。
・歌集『形相』(1948 年)。

・著作
『南原繁著作集』全10巻、岩波書店。
・Richard H. Minear（edited and translated), *War and Conscience in Japan. Nambara Shigeru and the Asia-Pacific War*, University of Tokyo Press, 2011.

＜研究文献＞
・南原繁研究会：http://nanbara.sakura.ne.jp/
　研究会編論集（to be　シリーズ。EDITEX)
・山口周三『資料で読み解く　南原繁と戦後教育改革』(東信堂、2009年)、
　　『南原繁の生涯　信仰・思想・業績』(教文館、2012年)。
・下畠知志『南原繁の共同体論』(論創社、2013年)。

＜演習の背景・経緯＞
・日本・アジアのキリスト教研究に向けて
　①東北アジア（朝鮮半島・日本・中国・台湾）のキリスト教
　②宣教師サイドからの視点との統合
　③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
　④アジアの固有の課題とキリスト教（アジアの近代史のコンテキストにおいて)
　⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
　⑥共同研究の実施

・日本キリスト教思想研究：近代日本とキリスト教思想との相互連関を中心に
　１．2001 年度の矢内原忠雄、2002 年度の内村鑑三に続いて
　２．近代日本（天皇制・民族主義）とキリスト教
　３．明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
　　新神学論争、植村・海老名論争
　４．2005 年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学（学問的キリスト教思想）の系譜
　　とくに、2006, 2007 年度は、植村正久とその思想的展開（高倉徳太郎）

５．2008 年度から 2012 年度まで、波多野精一。
６．2013 年度から、無教会キリスト教。

・研究会との相互関係：研究拠点の形成に向けて
「アジアと宗教的多元性」研究会（現代キリスト教思想研究会）
『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第 12 号。
『比較宗教学への招待－東アジアの視点から－』晃洋書房　2006 年

＜日本キリスト教史の現状＞
①通史の試み
②個別教派・教団・教会の歴史編纂
③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
④人物研究（内村、新島、海老名、新渡戸、植村など）
⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備
全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。
土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

＜文献＞
より包括的な文献表としては、http://tillich.web.fc2.com/sub9.htm、http://tillich.web.fc2.com/sub9a1.htm を参照。

Barrett, Kurian, Johnson（eds.）, *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001
Scott W.Sunquist（ed.）, *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編　『アジアにおけるキリスト教比較表』（創文社）
日本基督教団出版局編　『アジア・キリスト教の歴史』（日本基督教団出版局）
富坂キリスト教センター　『鼓動する東アジアのキリスト教』（新教出版社）
鵜沼裕子　『史料による日本キリスト教史』（聖学院大学出版会）
隅谷三喜男　『日本プロテスタント史論』（新教出版社）
『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社）
出口光朔　『近代日本キリスト教の光と影』（教文館）
土肥昭夫　『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社）
『歴史の証言　日本プロテスタント・キリスト教史より』（教文館）
海老沢有道・大内三郎　『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局）
中央大学人文科学研究所　『近代日本の形成と宗教問題』（中央大学出版部）
高橋昌郎　『明治のキリスト教』（吉川弘文館）
古屋安雄・大木英夫　『日本の神学』（ヨルダン社）
武田清子　『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』（新教出版社）
古屋安雄他　『日本神学史』（ヨルダン社）
石田慶和　『日本の宗教哲学』（創文社）
マーク・R・マリンズ『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー）

近藤勝彦　『デモクラシーの神学思想　自由の伝統とプロテスタンティズム』（教文館）
（植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁）
佐藤敏夫『植村正久』（新教出版社）
大内三郎『植村正久　生涯と思想』（日本キリスト教団出版局）

『植村正久論考』（新教出版社）
武田清子『植村正久　その思想史的考察』（教文館）
雨宮栄一『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』（新教出版社）
崔　炳一『近代日本の改革派キリスト教―植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究―』（花書院）
森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』（東京大学出版会）
森本あんり『アジア神学講義』（創文社）
徐正敏『日韓キリスト教関係史研究』（日本キリスト教団出版局）

＜『国家と宗教』序より＞

１．「改版の序」（1958 年）

「ある時代またはある国民が、いかなる神を神とし、何を神性と考えるかということは、その時代の文化や国民の運命を決定するものである。敗戦日本の再建は、この意味において、日本国民のそれまで懐抱して来た日本的精神と思惟の革命の要請であったはずである。」

「そこには、かえって旧い精神の復興の徴候はないか。真の神が発見されないかぎり、人間や民族ないし国家の神聖化は跡を絶たないであろう。」

「おしなべて、宗教の問題に対する近代的思惟は不幸な過程をたどって来た。十九世紀の実証主義的合理精神とその継承発展であるマルクス的経済唯物史観とは、宗教に対して無関心または否定の精神にほかならない。」（5）

「技術や経済的物質が神聖の座を占め、やがて宗教的代用物の役割を果たすようになるのである。」

「自然科学と技術文明の驚くべき威力」「現代政治の不安と恐怖」「絶対兵器の出現の前に、人類の存在自体が問われている」

「近代の過渡的反立の時代を経て、現在人類が直面するに至った政治的限界状況において、われわれは宗教的確信や信仰から何を導き出し得るであろうか。」

「文化闘争」「世界観闘争」（6）

「宗教と国家との関係の問題は、ヨーロッパ精神史の上に、最も純粋な形において展開された」（7）

２．「第三版序」（1945 年）

「問題は依然として「宗教」と「国家」――広く「文化」との関係であり、この難問の理論的解決についても、著者の見解を一層詳しく論述した。それ故に「補論」は、決して単なる補論ではなく、むしろ全体の「緒論」であり、同時に「結論」でもあるのである。読者はまず初めにこれを読まれるのも一つの順序であろう。」（10）

「日本にとって省察すべき根本の問題は実に「宗教」の問題、そしてそれと国家との関係に凝縮せられてあると言っていい。少なくともヨーロッパ精神史との関連において「キリスト教」が問題になる場合、これをいかに解決すべきであるか。」

「わが国が平和日本として真に世界史的民族たるの使命を自覚し、新しい精神と新日本文化の創造と、それを通して東亜はいうに及ばず、広く世界人類に寄与する上において、いくばくかの示唆を供し得んことは、純学術的労作の背後に隠された著者の目的でもある。」（10-11）

３．「序」（1942 年）

「全体を貫いて根本の問題が国家と宗教との関係」「西洋政治理論史研究」

「ヨーロッパ文化の始源」「プラトン『国家論』」「ギリシャ国民国家の伝統に立ち還る」

「ギリシャ国民の宗教的久遠の救済」

「キリスト教の出現」(13)
「二者の綜合ないし結合」「それ以後のヨーロッパ精神世界の根本問題」
「カント」「キリスト教的人間観と世界観が、客観的な科学的認識と不変の道徳的根拠に立てられたもの」「国家・社会および歴史の全体にわたってキリスト教的精神が展開せられるに至った基礎を形づくるもの」(14)「ヨーロッパ文化の新たな転回の志向」(15)
「国家の問題は、根本において全文化と内的統一を有する世界観のも問題であり、したがって、究極において宗教的神性の問題と関係することなくしては理解し得られないというのが、著者の確信である。」(15)